

Q30 保護者との連携に関して

〈このような状態は自閉症の特性からきています。〉

小学2年生のAさんは、理解できる言葉が増えて、教師の指示もおおむね理解し行動に移すことができるようになりました。しかし、自分の気持ちを伝えることは上手にできません。そのため、相手に自分の気持ちや意図することがわかってもらえず、時々大泣きすることがあります。

自閉症の子どもには、言葉の発達やコミュニケーションに様々な課題がみられ、話し言葉のない状態から、話し言葉に特異な特徴がある状態まで、様々な子どもがいます。そこで家庭と学校が連携を取り合い、いろいろな場面で言葉の理解を促し、自己表現ができるようにしていくと、周囲も適切な支援が可能になり、子どもの情緒の安定にもつながると思われれます。

〈このような場合の支援 1〉

小学校4年生の知的障害を伴う自閉症の男児。簡単な会話はできますが、自分のしたことや様子を話すことは難しいです。いらいらすると自分の手や鉛筆をかむ行動が見られます。お母さんは、何とか不適切な行動を減らし、周囲の人とコミュニケーションがとれるようになってほしいと願っています。このような場合、保護者との連携については以下のようなことが考えられます。

- ① 年度当初に、学校と保護者が連絡を取りながら協力して支援を進めていこうという姿勢を示す。
- ② 子どもの状態や特性、保護者の願いなどを聞いておくとともに、定期的に面談の機会を持ち、成長の様子や今後の課題などを話しあう。
- ③ 可能ならば、「〇〇ちゃんの連絡ノート」等を作成し、家庭での様子や学校での様子を互いに知らせ合うことで、子どもの会話を促すきっかけになったりする。
- ④ 学校での様子（生活や学習など）は、「～ができない」ではなく、「今日はここまでやりました」「こんなふうにやりました」などと客観的な事実を知らせる。
- ⑤ 不適切な行動で周囲に迷惑をかけた場合などは、その状況や支援した内容を具体的に知らせる。
- ⑥ 保護者にPTAの行事やボランティアなどにも参加してもらうことで、保護者同士のつながりもできる。その旨を保護者にお願いすることも大切。

〈このような場合の支援 2〉

小学4年生の高機能自閉症の男児。全校集会や自分の苦手な活動があるときは落ち着かなくなり、自分に関係ない会話でも悪口を言われていると受け止めてしまい、トラブルを起こすことが多いようです。このような場合、保護者と連携しながらできる支援の方法としては、以下のようなことが考えられます。

- ⑦ 担任の姿勢として、子どもを責めたり育て方を責めたりせずに、子どもに合わせた方法で一緒に考えながら支援することを保護者にもわかってもらう。
- ⑧ 特別な行事や苦手な活動については、子どもが見通しを持って活動できるように、事前に保護者にも知らせ、家庭でも話し合ってもらい、本人の不安を取り除くことをお願いする。
- ⑨ 必要なら「連携ノート」等を用意して、子どもが友だちとなかよく活動したこと、苦手なことにも取り組んだことなど、小さな変化も知らせることで保護者も安心し、教師への信頼感も増す。

学級担任の記録(メモ)

<項目の利用回数>



月／日	対象児の問題	教師やクラスの子どもの対応	対応後の対象児の様子